

社会支える障害者を

——就労促進へ70歳奔走



竹中ナミさんが優しく抱き、アニメ「ドラえもん」の歌を口ずさむと、重症心身障害を持つ長女麻紀さんは笑顔を見せた—神戸市東灘区で、梅田麻衣子撮影

「チャレンジド(障害者)の雇用・就労促進について」



て、相談に乗ってもらえませんか」。10月4日、一本のメールが、神戸と東京に事務所を置く社会福祉法人「プロップ・ステーション」理事長、竹中ナミさん(70)の元に届いた。自民党総務会長に就任した加藤勝信・衆議員からだった。

書者の法定雇用率を水増ししていたことが判明し、制度が揺らいでいた。渦中に厚生労働相の職を離れ、与党幹部として問題に取り組みむことになった加藤氏が、1億総活躍担当相時代から懇意にする竹中さんに助言を求めたのだ。

神戸に暮らす彼女は同12

日、東京・永田町に飛んでいた。「雇用率だけではあかん。チャレンジドが誇りを持てるような、多様な働き方のできる制度を新しく生み出さんと」。重度障害の起業家の例を挙げながら関西弁で発破をかける。加藤氏はうなずいた。

永田町の政治家や霞が関の官僚は「ナミねえ」と呼び、「目置く。情報通信技術(ICT)を駆使して在宅のままパソコンで働ける環境を整えるなど、障害者の就労を支援してきた。金髪メッシュにジーンズ姿。ギネス級」といわれる強心臓としゃべりを武器に政・官・財界を走り回り27年、気がつけば10月に古希を迎えた。行動力は衰えを知らない。

「チャレンジドを納税者に」。それが自らの「ミッシ

6面につづく

取材・文 桜井由紀治